『老人と海』の環境思想

渡久山　幸功

要　約

本稿では、Ernest Hemingway（アーネスト・ヘミングウェイ）の中編小説 *The Old Man and the Sea*（『老人と海』1952年出版）をエコクリティシズム理論を援用して分析した。エコクリティシズム批評の重要な概念「センス・オブ・プレイス」や環境破壊の視座などが本作品に描かれていることを証明し、人間と自然（動物）の一体化・融合あるいは両者の関係の二項対立的な固定観念を解消することを信条とする老人サンティアゴの漁師としてのカリブ海特有の海洋生物・天候の知識が、彼の環境意識・哲学のバックボーンとなっていると考察した。海洋自然の「厳しさ」は、サンティアゴによって「自然の美しさ」及び「自然の摂理」として認識される。それは、小説の重要なメッセージとして提示され、環境文学の特徴である環境への意識を読者に喚起させることを促し、環境や自然に対する従来の価値観の転換を読者に希求する意図がある「環境文学テキスト」であると指摘した。

キーワード:　アーネスト・ヘミングウェイ,『老人と海』, 環境文学, 海洋環境

He was sorry for the birds, especially the small delicate dark terns that were always flying and looking and almost never finding, . . . Why did they make birds so delicate and fine as those sea swallows when the ocean can be so cruel? (*The Old Man and the Sea*, p.19)

はじめに

本論の目的は、Ernest Hemingway（アーネスト・ヘミングウェイ 1899-1962）の後期の傑作 *The Old Man and the Sea*（『老人と海』1952）をエコクリティシズム批評理論を援用して分析することであるが、それはある文章を読んだことがきっかけである。Ecopoet（環境詩人）の第一人者であるアメリカ現代詩人 Gary Snyder（ゲーリー・スナイダー）が 1998 年に行われたインタヴューの中で、アメリカ・モダニズムの作家と「場所の文学」について次のように発言している。

山里：1950年代まで、つまりあなた方が文学的な出発をするまでは、場所の文学は忘れ去られていたということになりますか。
スナイダー：いや、先ほども説明したように、それは書かれ続けられていましたし、全く忘れられていたということではないと思います。
山里：しかし、メジャーな分野ではなかった。
スナイダー：マイナーなトピックだね、非常にマイナーなものだった。
山里：T. S. エリオットやヘミングウェイやフィッツジェラルドなどのモダニストは場所にはあまり関心がなかったですね。

スナイダー：　関心がなかったね。（山里『場所』p.79）

T. S. Eliot や F. Scott Fitzgerald に関しては大方納得できるだろうが、ヘミングウェイに関する上記の指摘はどうだろうか。ミシガンの森や川や湖、アフリカのサバンナを題材にした作品が多数あることを考慮すれば、たとえ彼の全作品が自然を前景化していなかったとしても、ヘミングウェイ研究者にとって、彼にネイチャーライター的要素があることはほとんど自明なことではないだろうか。特に、Susan F. Beegel の近年のめざましい一連の批評活動で明らかにされたヘミングウェイのネイチャーライターとしてのエコロジーへの関心は否定のしようがないと思われる[1)]。しかし、モダニストの代表的小説家というイメージから彼の作品の環境的要素があまり注目されなかったことは確かにあるだろう。また、彼が他のアメリカ文学者同様に移動を特徴として、母国アメリカ以外に、ヨーロッパ、アフリカ、キューバなどを小説の舞台として選んでいる事実から、「場所」に対する思い入れが希薄であるという印象は助長されているかもしれない。しかし、スナイダーが指摘するように、他のモダニストたちのようにヘミングウェイも本当に「場所」にあまり関心を払わなかったのだろうか。

本論では『老人と海』のテキスト内の海の自然描写及び主人公 Santiago（サンティアゴ）が表明する環境思想を分析し、この作品が environmental writing（環境文学）として成立するかどうか検討していく。この作品は、『ユリイカ』「特集＝ネイチャーライティング」（1996年3月号）において、「アメリカン・ネイチャーライティング・ブックガイド30」のリストに入っており、アメリカ文学において代表的なネイチャーライティングの一つとして認知されているが、ここでは、さらに環境文学における「場所の感覚」としての海の前景化、ヘミングウェイの環境思想、漁業資源乱獲、食物連鎖とフィッシングの意味に焦点を置き、「環境詩人」ゲーリー・スナイダーのネイチャーライティングや環境文学の定義を参照しながら『老人と海』の環境文学的側面を解明していきたい。

I　環境文学における海の分析：「場所の感覚」としての海

スナイダーは同インタヴューの中で William Faulkner（ウイリアム・フォークナー 1898－1965）の中編小説 *The Bear*（『熊』）について、「『熊』はすぐれた作品だと思います。アメリカン・ネイチャーライティングの偉大な古典の一つ」であると語っている（山里『場所』p. 83）。スナイダーの同僚であった Peter L. Hays は、『熊』と『老人と海』の比較研究を行い、両作品の類似性を指摘している[2)]。ヘイズ論に依拠すれば、『熊』がネイチャーライティングの次元を抱合しているならば、『老人と海』も同様にネイチャーライティングの次元を含んでいると考えられるのではないだろうか。

スナイダーが『老人と海』を環境文学として視野に入れないのは、この作品の舞台が「海」であるということが一つの要因であろう。惑星地球の生態系にとって陸地同様海洋も重要なエコシステムなのであるが、海洋文学研究者であり、エコクリティシズムを援用し、批評活動を展開する山城新によれば、これまで海洋文学がエコクリティシズム批評の分野で軽視されてきたと指摘する。

> "the study of sea literature, a broad genre dealing with the oceanic environment and human interaction with it, has not been a popular focus in eco criticism . . . . If sea literature has been neglected simply because our experience as humans has mostly based on land and terrestrial experience, we need to realize that this lack of attention to the ocean may be fatal

> to the future of the global environment . . . . I would like to remind you that seascape has been an important part of literary scholarship and that our ecocritical approach should be aware of it. (Yamashiro "Are Catastrophic Storms" pp.99-100)

このような seascape の一般的な軽視には、seascape の自然描写の困難さという技術的な問題があり、山城は次のように指摘している。

> On the surface of the water, people on the sea cannot help but meditate on romantic or philosophical thought simply because there are few things visible upon the sea. They can feel the seascape though such things as the winds, tide, and water, but often are unable to represent it. Because of its overwhelming emptiness, vastness, and limitless qualities, the seascape is rather filled with the human psychological states of awe, mystery, or fear. (Yamashiro "The Gaze upon the Sea" p.79)

生態地域主義 (bioregionalism) における「場所の感覚」(sense of place) という観点からみれば、「海」はその地域性を表現しにくい点があるのは事実であろう。しかし、landscape と同様に seascape も様々な自然物質で表現できるはずである。例えば山城は "Seascape consists of the sun, winds, waves, tides and the transitions and combinations of these natural phenomena: it is also an important part of a navigation log, recording how and where a ship is proceeding." (Yamashiro "Are Catastrophic Storms" p.100)とまとめているが、これに月、星、雲なども含まれ、同時に鳥や海洋生物（魚類、海草など）も seascape の構成要素として考慮に入れてもいいだろう。『老人と海』ではこれらの諸要素がすべて表現されており、代表的な描写は次の引用である。

> *He looked across the sea and knew how alone he was now.* But he could see the prisms in the deep dark water and the line stretching ahead and the strange undulation of the calm. The clouds were building up now for the trade wind and he looked ahead and saw a flight of wild ducks etching themselves against the sky over the water, then etching again and *he knew no man was ever alone on the sea.*
>
> He thought of how some men feared being out of sight of land in a small boat and knew they were right in the months of sudden bad weather. But now they were in hurricane months and, when there are no hurricanes, the weather of hurricane months is the best of all the year. . . . He looked at the sky and saw the while cumulus built like friendly piles of ice cream and high above were the thin feathers of the cirrus against the high September sky.
>
> 'Light *brisa*.' he said. "Better weather for me than for you, fish.'
>
> (イタリック強調筆者 *The Old Man and the Sea*. p.88)

動物と人間と対等に見るサンティアゴは、渡り鳥を見て、海上では人間は決して孤独ではないと再認識する。ここには風の強弱、波のうねり、雲の形、渡り鳥、空模様、ハリケーンの時期の天候など、様々な海の特徴によって詳細に描写されており、夏の終わりのカリブ海の「場所

の感覚」がかもしだされている場面ではないだろうか[3)]。スナイダー自身は「場所の感覚」の表現について次のように提示している。

> もし、ある作品が、自然の光景や自然環境の独得な雰囲気、音、においなどを豊かに喚起することができるのであれば、そこには場所の感覚があるといえます。場所の感覚を獲得するためにはいろいろな方法があるでしょう。たとえば作家がよくやるように、ある場所に出かけていってちょっとしたそのディテールを使う手もある。それから、ある場所に長い間住み続けていて、その場所を熟知し、特別に意識することなく、あたりまえのように場所について語ることができる人もいる。三番目の例は、これが私たちにとっては興味のあることですが、意識的に自分の中で場所の感覚を深化する例ですね。そのためには、すべての細部を明晰に理解する必要がある。（下線強調筆者 山里 p.73-74）

スナイダーの説明は、『老人と海』の描写にきれいに符合しているように思われる。ヘミングウェイは、長年フロリダ州のキー・ストーンやキューバに住み、釣りの豊富な経験を経て、カリブ海の自然を理解していたのではないだろうか。ウォレス・ステグナーは、アメリカ人を「場所を持たない者」と「場所を持つ者」に分類しているが、後者の定義として、山里勝己は「「場所を有する者」は自然との交渉を重ね、その中で自らのアイデンティティを確立し記憶を蓄積する」（山里「センス」p.231）と説明している。これは漁師サンティアゴ像を端的に表す説明にほかならない。

II　ヘミングウェイの環境思想

ヘミングウェイの作品の「環境文学」的な側面が見逃されてきた二つ目の要因は、彼の代表作、特に長編小説が自然環境よりも人間社会を描き、そのテーマが「愛・セックス、死、戦争」という長編小説プロットの構成三大要素を扱っているからではないだろうか。他方で、『老人と海』はこの三大要素のいずれもテーマとしていない。このことから彼の代表作とは一線を画す作品と言えるだろう。

ヘミングウェイの自然環境に対する意識は1930年代にすでに表明されており、その例としてノンフィクション *Green Hills of Africa* (1935) では、未開の土地に人間（特に植民者としての西洋人）が入植し、それ以後の移動のプロセスは、自然の急激な変化を伴うと看破している。

> A continent ages quickly once we come. The natives live in harmony with it. But the foreigner destroys, cuts down the trees, drains the water, so that the water supply is altered and in a short time the soil, once the sod is turned under, is cropped out and, next, it starts to blow away as it has blown away in every old country and as I had seen it start to blow away in Canada. The earth gets tired of being exploited. A country wears out quickly unless man puts back in it all his residue and that of all his beasts. (*Green Hills* p.284.)

また、『老人と海』出版後のアフリカ滞在を描いた *Under Kilimanjaro* (2005) の中で、ヘミングウェイはアフリカのサバンナの森林や植物及び現地人カンバ族の畑を荒廃させる象による被害を目の当たりにして、「個体数調整」(elephant control)が必要だと考える場面がある (“There had to be some sort of elephant control. Seeing this damage to the forest and the way the trees were

pulled down and stripped and knowing what they could do in a naïve *shamba* [farm] in a night I started to think about the problem of control." Hemingway. *Under Kilimanjaro* p.18)。このようなヘミングウェイの環境意識は、幼いころから自然を愛し、慣れ親しんできた彼自身の実体験がバックボーンになっており、これは漁師として海への理解を進化させたサンティアゴの自然環境への意識・認識とオーバーラップするものであろう[4)]。

III 『老人と海』の海：「舞台背景」それとも「キャラクター」？

ゲーリー・スナイダーは、先に引用したインタヴューの中で、19世紀のアメリカ文学史の「リージョナル文学」と彼が提唱する「バイオリージョナル文学」との違いを説明として次のように説明している。

> スナイダー：・・・過去のリージョナルな文学は主として地方文化の細部や特殊性、たとえば言葉やライフスタイルなどを描いてきたんですね。南部を見たらわかると思います。しかし、自然環境は、まあ、舞台装置のようなものになっていました。
>
> 山里：舞台背景ですね。
>
> スナイダー：そう、自然は舞台背景でしかなかった。しかし、中にはランドスケープが作品全体の中で主要な役割を果たす作品ももちろんありました。その方がフェアな言い方でしょうね。ただ、やっぱり人間への関心がそのような作品の主要な関心事です。それに、地域主義の文学は、そのほとんどについて言えることですが、アメリカ先住民のことは書きませんね。白人の文学なのです。（山里『場所』p.72）

ヘミングウェイの文学は、確かに白人の文学であろうが、同時にアメリカ先住民に関して非常に高い関心を示し、アメリカ先住民やアフリカの現地人を描いた作品も多い[5)]。

ネイチャーライターのTerry Tempest Williams（テリー・テンペスト・ウイリアムス）は、1996年に開催されたヘミングウェイ研究大会での基調講演において、"For Ernest Hemingway, landscape, nature, may be the primary character throughout his work."（Williams p.12）と指摘しているが、同様に『老人と海』ではメキシコ湾流域（Gulf Stream）のseascapeが重要なcharacterとして機能している。Susan F. Beegelは、サンティアゴにとって愛しい女性的な役割が「海」に与えられているとして、老人と同様に物語の主人公として解釈し、海を単なる「場所」ではなく「生命を宿すもの」として捉えるよう提案している。そのように海を女性的に捉えるジェンダー化の重要な意義は、人間と自然の正しい関係を示唆しており、そのためにこの物語が環境倫理を強く打ち出している可能性があると指摘している（Beegel "Santiago and the Eternal Feminine"）。

サンティアゴは孤独な海上において、周りの自然や身体に話しかける。あたかも自然と交感を求めているかのようであり、あらゆる動物を自分（人間）と同等に考えているようである。

> The hawks, he thought, that come out to sea to meet them. But he said nothing of this to the bird who could not understand him anyway and *who would learn about the hawks soon enough*. 'Take a good rest, small bird,' he said. 'Then go in and *take your chance like any man or bird or fish*.' (イタリック強調筆者 *The Old Man and the Sea*. p.78)

この描写は冷徹な環境法則に対する態度を簡潔に表現している箇所である。

また、この物語では、サンティアゴという固有名詞はほとんど使用されていない。特に、孤独な海上では、固有の名前が重要ではないかのように、老人 (the old man) として表現され、あたかも彼が人間全体を代表するアレゴリーとしての機能があるかのような解釈も可能なほどである。ヘミングウェイ自身は過度な「象徴的読み」(symbolic reading) に反対しているが、アレゴリカルな要素は、小説のタイトル *The Old Man and the Sea* にも反映されている。シンプルなタイトルは寓話的な要素が示唆されているが、サンティアゴという固有名詞が使用されていない老人は、題名および物語全体を通して、人間としての特権を剥奪されているといってよいだろう。例えば、フォークナーの *The Bear* のように、*Santiago and the Marine* という題名の方がより魅力的なタイトルではないだろうか。しかし、ヘミングウェイにとって、海という舞台が非常に重要な意味をもっているため、海を単なる背景舞台ではなくキャラクター（ストーリーの主要なエージェント・行為者）として地位を格上げしたのである。少なくともサンティアゴと海は物語のレベルで同格的な扱いとなっていることがタイトルにも端的に反映されている。

IV　漁業における環境破壊

サンティアゴの漁の方法は、極めて原始的なものである。これは 1950 年代の漁法としては、ある意味時代錯誤的である。少なくともこの方法では大量漁獲を期待することはできず、84 日間の不漁（*salao*）もありえる非効率的な漁法である。このシンプルな漁法は、生態系保全にとって意味を持つことになる。Bickford Sylverster はキューバにおける魚の乱獲が懸念されていた状況が、作品に反映されていると主張している。

> It is a conflict between progress and tradition, between craft passion and exploitation– in short, between the old Cuba and a new Cuba that Hemingway saw emerging in the 1940s. Manolin's father has opted for progress. The fisherman he chooses for his son is a middle-aged man, but his minimally competent, cautious methods yield a steady profit. Thus he is associated with the "younger fishermen" who are motivated only by the money they at have been making by supplying shark livers for the booming "cod liver oil" industry in the United States in the 1930s and 1940s. These mechanized fishermen represent the decline of the old Cuban fishing culture and the beginning of an exploitive fishery. Actually, in their use of buoys and floats, they are the precursors of the disastrous "long-line" fishery that spread across the Atlantic immediately after this novel was published, and which threatens, some claim, to render all billfish extinct in all oceans by the year 2000. (pp.257-58)

マノリーンが乗っている漁船は drifting net を使用する船であり（"drafting boats"）、経済利益を優先した大量捕獲を意図したものである。それに対し老人の漁法は、大量漁獲を狙ったものではないことは明らかであり、若い世代の漁師の考え方と大きく異なる点である（"Some of the younger fishermen, those who used buoys as floats for their lines and had motor-boats, bought when the shark livers had brought much money, . . ." *The Old Man and the Sea*. p.36.）。Susan F. Beegel は老漁師と若い世代の漁師を比較して、老人にはエコロジカルな倫理観が備わっていると主張している[6)]。

V『老人と海』の食物連鎖

彼の作品と自伝的要素を考慮すれば当然のことかも知れないが、ヘミングウェイのハンターとしてのイメージは広く流通している。ヘミングウェイとスタインベック研究の第一人者である Jackson J. Benson は両モダニスト作家を比較して、前者をハンターとして、後者をファーマーとして捉えている。

> In Hemingway's fiction, man's stance toward nature is somewhat more complex than that expressed in the author's life, but the emphasis is still on the ultimate domination of the external world by acts of hunting and killing. The Hemingway character may feel at home in nature and be fond of its benign features, as is Nick Adams in "Big Two- hearted River," written at the beginning of the writer's career, and Santiago in *The Old Man and the Sea*, near the end. . . . Both men, however, catch their fish and, in doing so, prove something about their skill and endurance. And neither is so close to nature that he does not think of it as an adversary, dangerous and even treacherous. The Hemingway protagonist feels close to nature not because he feels a part of it but because, like the bullfighter, he has studied it and is an expert in dealing with it. . . . Steinbeck was also concerned with survival, but in a biological sense, rather than egocentrically. Unlike Hemingway, he was not very competitive man, and his relations with nature were based on a desire to understand and cooperate with the environment rather than dominate it. . . In all its suffering, the Hemingway protagonist tells us, humanity is important; in Steinbeck's work humanity is but a speck in a very large universe—if man suffers, it is precisely because he thinks he is more important than he is. By refusing to see himself as primarily a biological entity, related to other animals and the ecological whole, man not only suffers but makes everything around him suffer also. (Benson pp.219-20)

このようなハンターとしてのイメージがヘミングウェイを必要以上に制限している。『老人と海』を環境文学としてとらえることを妨げる最大の要因は、サンティアゴのカジキ釣りとその後の鮫との格闘であることは間違いないであろう。そして、サンティアゴ自身のマカジキ釣りの複雑な意味付けがさらにエコクリティシズムの援用を難しくしているように思われる。

> You did not kill the fish only to keep alive and sell for food, he thought. You killed him for pride and because you are a fisherman. You loved him when he was alive and you loved him after. If you love him, it is not a sin to kill. Or is it more? (*The Old Man and the Sea*. p.162)

サンティアゴ自身も美しいカジキを釣り上げることによって必然的に生じる魚の「死」が罪なのかと自問自答してしまうジレンマを抱えている。エコクリティシズムの第一人者である Glen A. Love は、『老人と海』は環境文学として十分な資質を保有していないと評価している。

> As great as it is, *The Old Man and the Sea* is no treatment of acceptance. The self-exaltation of tragedy does not permit it to be. In Hemingway's fine but narrow world, there is no room to maneuver except at the edge of death, no arresting of the cycle in which one must go forth to kill one's brothers, turning to the natural world as the arena for human greatness but

> effecting thereby its further diminishment. . . . If *The Old Man and the Sea* approached a humanistic ethic or a truce with nature that pleased many of Hemingway's critics, one finds no evidence that this testament of acceptance could transcend its anthropocentrism. It does not include a recognition that the villainous shark, for example, in no less necessary to the nobility of the sea than the marlin and the porpoise and the turtle; that the elimination of the shark would threaten the other species on whom it preys; that, by taking the wounded or the feeble or the slow or the old, the shark, by trimming the numbers of fish, keeps their proportions appropriate to the food supply. Hence there is more at issue in Santiago's self-doubts than Greek hubris or Christian pride. Beyond these, there is the greater folly of his assumption that the only order to the biotic world is that which his limited understanding can prove. (Love p.129)

ラヴの基本的な考えは、サンティアゴには動物全体に公平な生態系的価値が欠如しており、鮫を悪役として嫌っているため、それらの生態系的な役割を見落としている点を批判している。また、アメリカにおける数少ないヘミングウェイの作品へのエコクリティシズム批評を網羅して論文を書いたエコクリティシズム研究者伊藤詔子によれば、サンティアゴは「悲劇的思考を体現」し、「運命を受苦する古典的な人物」であり、「反エコロジー的」主人公であると指摘し、次のように結論付けている。

> ヘミングウェイのようなハードボイルドの作家に親自然的態度を浅薄にあるいは安易に求めるとしたら場違いなことになる。というもの狩猟への愛に生きたヘミングウェイは、すべての生きものの循環の原理を信念とし、生きものの権利に目覚めるにつれ狩猟への本能を克服してしまった多くのネイチャーライターとは相入れない。（伊藤 p.145）

この文章を素直に解釈すれば、「環境文学」あるいは「ネイチャーライティング」には作家自身の環境保護主義者としての資質が要求されている。換言すれば、環境保護主義者しか「環境文学」を書くことができないということになる。

しかし、ヘミングウェイにとって、狩り・釣りというのはスポーツとしてではなく、食糧確保としての極めて基本的な動物の生存本能に即した行動の一部であることを理解しなければならない。テリー・テンペスト・ウイリアムスはヘミングウェイのハンティングの倫理観が家族から受け継いだナチュラリストの遺産であるとして次のように述べている。

> Hemingway's rapacious appetite for the facts of nature supports his apprenticeship as a child, a naturalist. He was mentored by his paternal grandmother Adelaide who was a botanist and his father, Clarence Hemingway, an amateur naturalist himself who gave young Ernest an "ethic of place," not only a love of hunting but a reverence and respect for the hunted, beginning with "eat what you kill." (Williams p.12)

サンティアゴがカジキを獲る意味は、人間として生きていくために必要なものであり、また、自然の摂理からして当然のエネルギー循環を継続させる一部なのである。サンティアゴの漁は野生動物が行っている生存行為と同義なのである。照山雄彦によれば、『老人と海』には、

> 亀や鳥や魚、あるいはライオンにおけるサンチャゴの感慨を通して、大自然との一体化を図った作家のグローバル的な自然観が表明されており、そこから人間とあらゆる生物と自然、つまり全てのものの同一概念が捉えられる。そこには作家の、生物の食物連鎖的思考、その意味での人間と生物の同類間、更にそこから見出される人間の形而上における観念がある。これらの観念は、全生命を原初的な自然観から捉えるというところから表出されるものであり、ヘミングウェイはこの作品に全生命を同等の立場として描いている。そこには弱肉強食過酷な世界が存在するのはいうまでもないが、彼はそれを生命の自然観に結びつけて、そこにおける「不屈」な「生存」をサンチャゴで描写している。（中略）このような原初的な自然観における人間の「生存」を我々に示唆するこの作品は、一見神話的役割を果たすが、しかし、示唆するところが本能に従った「不屈」な「生存」であれば、本能にしたがったものではない人間の「生存」に対する、アイロニーを表出しているともいえる。すなわち、全ての生物のアプリオリな次元からこの作品は成立されているのである。（照山 pp.388-89.）

自然環境の生物学的現実を直視し、その生態系のサイクルの中でどのように人間と非人間的な生命体との関係を理解・認識していくかという難題に直面するとき、「生存」という概念においては相反する「生」と「死」が、実は表裏一体、あるいは、あるレベルにおいては同義語であるという認識（自己の生は、他者の死によってのみ成立する）が必要となるかもしれない。Susan F. Beegel はサンティアゴのモデルとなった実在の漁師について次のように書いている。

> The blood of life may only be spilled to nourish life. . . . He [Santiago] is drawn in part from Hemingway's Cuban boat-handler, Carlos Gutierrez, who unlike the trophy-hunting sport fishermen calls the marline "the bread of my children," relating it to the staff of life—and the continuity of life. (Beegel "Santiago and the Eternal Feminine" p.140).

サンティアゴには、アメリカ・インディアン的な思想、アニミズム的な考えがあり、その母胎として海を女性的に捉え、生命の深遠と尊さを理解している人物造形（造詣）になっているのではないだろうか。

結び

山城は海洋のエコシステムにおける海洋生物の生態を正確に広める作業に対して次のようにコメントしている。

> It is scientists and divers who have spent a lot of time looking at the ocean that have mostly contributed to sympathy toward the oceanic environment through their writing because they are more aware of the reality of the ocean and its endangered animals. (Yamashiro. "When Villains Become Victims: Sharks" p.122.)

科学者やダイバーのほかに海を熟知しているはずの漁師が含まれていないのは何故だろうか。漁師は漁業によって生計を立てるために、経済的利益を優先させるために生態系の重要さを考えないのであろうか。ヘミングウェイもそれを感じていて、そのために海を愛する・理解するサンティアゴを変わった老人 ("I am a strange old man" p.7/ "I told the boy I was a strange old

man. . . . Now is when I must prove it." p.49) として設定したのだろうか。ヘミングウェイは確かに漁師ではない。しかし、彼はフロリダ州のキーウエストに住居を構え、また、キューバにも実際に住んで、フィッシングを行ってきた。彼は海の現実・生態をよく知っていたといえるのではないだろうか。フィッシング経験から得た海及び海洋生物の知識を存分に利用しながら『老人と海』は創作されたと考えたほうが自然であろう。

The Sun Also Rises（『日はまた昇る』1926）が、実在した一人の負傷兵士の状況と作者自身の実体験を融合させてフィクションとして発展させたように、『老人と海』も実在した一人の老漁師の体験をヘミングウェイのフィッシングの経験と融合させたフィクションである（"On the Blue Water" pp.184-85）。1930年代の出来事を1950年代に時間をずらせて、極めて原始的な（時代遅れの）漁法を行う老漁師をあえて中心人物に設定することで、乱獲に警鐘をならす環境保護に関する彼の考えを暗示させている。また、実際のモデルとなった漁師は、マカジキを鮫に狙われたあと、救助され「半狂乱」状態であったとヘミングウェイは報告しているが、小説のサンティアゴのリアクションとは対照的な振る舞いである。そこには作者の創造が反映されており、自分自身を含めた作家を基本的には「嘘つき」と呼ぶ所以であるが、その差異、特に、老人の感情をあらわにしない淡々とした描写は注目すべき価値があるように思われる [7)]。

高等教育を受けていないサンティアゴだが、漁師という職業を通して、彼は海の重要さを理解していると考えられる。マカジキと格闘しているとき、彼の漁師としての強い決意はあふれ出ているが、彼の行動は全体的に淡々としたものである。真実の開示的なエピファニックな瞬間は描かれていない。彼の生涯の漁師としての経験と英知が海洋自然に対する鋭い洞察力を育くむものとして機能しているため、エピファニーは必要ないのであろう。釣ったマカジキが鮫に襲われるとき、その悲劇的運命を自然の一部として享受している。これは人間中心主義的な思考（anthropocentrism）を超越し、生物中心主義的な思考（biocentrism）を体現していると言えるであろう。エピファニックな瞬間が現れるとすれば、主人公のサンティアゴにではなく、読者の方に自然環境に対する我々人間の考えが誤りであったというエピファニーが顕現される。トーマス・ライアンが強調するように「ネイチャーライティングの決定的な意義は、それによって読者がエコロジカルなものの見方に目覚めることである。・・・それは自然の中のパターンを認識することであり、そのような認識は倫理的に重要な意味を帯びていて、ついには人間であることの意味を問い直す契機となり得る」のである（山里「ネイチャーライティング」p.227）。『老人と海』はこのような意義と意味を表現している重要なエコロジカルなテキストである。

ゲーリー・スナイダーは先のインタヴューの中で、俳句について次のように指摘している。

> 俳句は、たとえば植物や鳥に関する広い知識、川に関する知識など、その基礎としてすでにたいへんなエコロジカル・リテラシーを有しているんですよ。<u>厳密な意味では科学的ではないかもしれないが、その情報量は場所の感覚を生成するには十分に豊かなものだと思います</u>。（下線強調筆者 山里『場所』p.75）

ヘミングウェイは環境学的な科学言説を援用していない点において、厳密な意味では、彼は「環境文学者」ではないかもしれない。しかし、スナイダーの指摘と同様な意味において、少なくとも彼の慣れ親しんだ自然との会話・交感を通して、エコロジカルな感性を獲得していたといえるであろう。スナイダーが、ヘミングウェイは場所に関心を持たなかったと発言したのは前述のとおりだが、彼の「場所の感覚」、「ネイチャーライティング」、「バイオリージョ

ナリズム」に関する説明は、ヘミングウェイの多くの作品に当てはまり、逆に彼自身の定義によって、ヘミングウェイに対する彼の認識が誤りであること（つまりヘミングウェイの作品の自然環境とのかかわりの深さ）を裏付けているように思える。特に、次の「場所の文学」に関するスナイダーからの引用はヘミングウェイの創作活動と自然環境の関係と重なるであろう。

> 場所の文学は人間を巻き込んだもので、場所だけを描くものではない。それはノンヒューマンの世界と人間の複雑な関係を示唆するものです。だから、二一世紀の世界でわれわれがやるべきことは、人間はどこにいても自然のコンテクストの中で生きているということ、人間は場所を喪失し場所から引き離された存在ではなく、自然の中に生きているということを示すことだと思います。（山里『場所』p.87）

『老人と海』の最後の場面で、女性観光客が浮かんでいるマカジキの骨を見て、「鮫の美しさ」に感嘆する場面がある。これはレストランのウェイターの説明を誤解したために、鮫の骨格の美しさを想像するのであるが、エコクリティシズム的な視点から見れば、凶悪な鮫のイメージを覆す「自然の美しさ」を表現しているシーンと解釈できるであろう。生態系の一部としての鮫の美しさを見抜けない人間の解釈が既成観念として流通していたのであって、カジキと同じく鮫も自然の美しさを体現しているのである（“But you enjoyed killing the *detsuno*”, he thought. He lives on the live fish as you do. He is not a scavenger nor just a moving appetite as some sharks are.” *The Old Man and the Sea.* p.162）。サンティアゴは、カジキを襲った鮫の肝油を滋養強壮のために食するかもしれない。そうなれば間接的に大物カジキを食することになり、自然のエネルギー循環に組み込まれていることになるのである（“He also drank a cup of shark liver oil each day from the big drum in the shack where many of the fishermen kept their gear. It was there for all fishermen who wanted it.” *The Old Man and the Sea.* p.26）。

伊藤が指摘する「共死の思想」（伊藤 pp.146-47）は、究極的には環境自然の摂理・秩序体系を意味しているのであろう。しかし、人間を含めたすべての動物は生存本能が衝動となってサバイバルのために必要最低限の捕食を行う（“. . . everything kills everything else in some way.” *The Old Man and the Sea.* p.162.）。その捕食行為が地球上の生物全体にとってかけがえのない環境・自然を維持し、微妙な生態系バランスを保っているのである。我々にはそのような食物連鎖を「美しい」と理解する認識が必要である。人間（human）と非人間（nonhuman）を同一視するということは人間が自然の一部であるということを認識するプロセスであり、それはつまり、捕食者としての人間の立場を冷徹にかつ正当に理解することである。このことから類推すれば、食料確保のハンティング行為を悪しき人間行為と捉えることは、食べるために捕食する動物を人間より下位層にあることを意味し、そのような視点を持つエコロジー概念は「人間中心主義的」な次元を内包しているのではないだろうか。人間も生態系の一部であるとするヘミングウェイの環境意識は、少なくとも自己矛盾を起こすような偽善性を有しておらず、彼の生来の原初主義（primitivism）の根源の一つだと考えられる。

「悲劇の美しき敗北」を物語る『老人と海』をエコクリティシズムの視点から見れば、大物カジキを失ったサンティアゴの「悲劇」は、自然界では十分ありえる「自然」なことである。三日間にわたって釣り上げた巨大なマカジキが、最終的には鮫に食い尽くされてしまうという結末は、物語の展開上ヘミングウェイによる伏線があり、サンティアゴはそれを自覚している。

> "Unless sharks come 'he said aloud.' If sharks come, God pity him [the marlin] and me" (*The Old Man and the Sea*. p.51).

> "How many people will he [the marlin] feed,' he thought. 'But are they worthy to eat him? No, of course not. There is no one worthy of eating him from the manner of his behaviour and his great dignity" (*The Old Man and the Sea*. p.57).

老人がしとめたマカジキを小船に横付けにして港に戻るとき、鮫が現れたのは偶然ではなかった。（"The shark was not an accident. He had come up from deep down in the water as the dark cloud of blood had settled and dispersed in the mile-deep sea." *The Old Man and the Sea*. p.77.）広大な海においてサバイバルをかけた生命活動は絶え間なく行われている。そのため、この悲劇的な結末は「過酷な自然の厳しさ」が生命を維持するための「自然の美しさ」へと変質する価値転換を要求している瞬間なのである。この小説で最も有名な文章（'But man is not made for defeated,' he said. 'A man can be destroyed but not defeated.' *The Old Man and the Sea*. p.80）は過酷な自然の摂理・秩序と人間としての運命を受け入れていることを高らかに宣言しているのではないだろうか。

サンティアゴが見るアフリカの白い浜辺でじゃれるライオンの夢（"Why are the lions the main thing that is left?" *The Old Man and the Sea*. p.49）が示唆しているものは、ライオンに生まれ変わりたいという無意識の再生願望であり、彼の内的欲望を反映しているのであろう。

> After that he began to dream of the long yellow beach and he saw the first of the lions come down onto it in the early dark and then the other lions came and he rested his chin on the wood of the bows where the ship lay anchored with the evening off-shore breeze and he waited to see if there would be more lions and he was happy. (*The Old Man and the Sea*. p.62.)

人間と非人間の境が解体、あるいは融合を意味する人間から動物への変身の瞬間は、「環境文学」としての小説のエンディングとして極めてふさわしいのではないだろうか[8)]。

注

1）『老人と海』の環境文学的側面・特質については、Susan F. Beegel の環境批評の一連の論考の他に Patricia Dunlavy Valenti による同作品の解説書の第２章 "The Cuban Environment: Geography and Climate and the Living Organism They Support" を参照せよ。特に Bonnie Kelley 博士とのインタビュー・セクションにおいて、博士はこの小説内の海洋環境のヘミングウェイによる描写の正確さを指摘している。

2）『老人と海』と『熊』の類似性と差異を分析した研究として Hays 論以外に David Timms の研究がある。

3）小説の冒頭でサンティアゴの皮膚がんの説明があるが、それはほとんど一年中灼熱の太陽の光が降り注がれる南の海洋・カリブ海という場所を喚起させる。（"The brown blotches of the benevolent skin cancer the sun brings from its reflection on the tropic sea were on his cheeks. The blotches ran well down the sides of his face." Ernest Hemingway. *The Old Man and the Sea*. p.3）

4） スナイダーの重要な概念の一つに「再定住」（reinhabitation）という概念があるが、山里はこれを「土地に根をおろした生活をすること、その土地の生態系を注意深く学びながら定住者になること」（山里『場所』p.180）と定義している。ヘミングウェイも同様な考えを持っていたようで、Ryan Hediger は "deep inhabitation" という概念を用いて次のように説明している。

> In the second safari, Hemingway extends and solidifies many of lessons he learned on the first safari, constantly underscoring the value of deep inhabitation. In a key passage, he does so explicitly, and as is often the case in his work, he writes about his awareness of place in terms of the animals who live there: " I thought how lucky we were this time in Africa to be living long enough in one place so that we knew the individual animals and knew he snake holes and the snake that lived in them" (*UK*p.116). (イタリック体強調筆者 Hediger p.41)

5） Jeffery Meyer は、ヘミングウェイのアメリカ・インディアンへの関心を報告している。"Hemingway had fifty-seven books on Indians in his library and was well read in anthropology" (Meyers p.304).

6） この点に関して、Ryan Hediger が Beegel を引用して次のようにまとめている "Beegel argues that Santiago's approach to technology allows him 'to uphold an ecological ethic diametrically opposed to Ahab's 'iron way' ("Santiago and the Eternal Feminine" 143). She points out that the younger fishermen with all their gear 'are the ancestors of today's long-liners' (143)" (Hediger. pp. 54-55).

7） *Under Kilimanjaro* で表現されているこのようなヘミングウェイの文学哲学を比嘉美代子は「優れた作家とは事実を書くのではなく、真実以上の真実を創り出すために嘘をつく・・・。作家は自分の知っていること、また見聞したことがらをそのまま書くのではなく自己のあらゆる能力と精神を傾注して想像力を働かせ真実（芸術）を創作することが肝要」であると分析し、ヘミングウェイの主旨を解説している（比嘉 p.47.）。ヘミングウェイの考えに従うと、『老人と海』のエンディングにおけるサンティアゴの心情・態度に暗示されている「真実以上の真実」とは何かについて分析は非常に重要だろう。

8） サンティアゴは物語を通して、動物との自己同一化を語ったり、動物に変身したい気持ちを表現することが多い。 "Most people are heartless about turtles because a turtle's heart will beat for hours after he has been cut up and butchered. But the old man thought, I have such a heart too and my feet and hearts are like theirs." (*The Old Man and the Sea*. pp.25-26.); "I wish I was the fish [marlin], he thought, with everything he has against only my will and my intelligence." (p.48); "Still I would rather be that best [the marlin] down there in the darkness of the sea." (p.51)

参考文献

Beegel, Susan F. (2002) "Santiago and the Eternal Feminine: Gendering La Mar in *The Old Man and the Sea." Hemingway and Women: Female Critics and the Females Voice*. Eds by Lawrence R. Broer and Gloria Holland. Tuscaloosa: U of Alabama P.pp.131-156.

Beegel, Susan F. (2000) "Eye and Heart: Hemingway's Education as a Naturalist" in *A Historical Guide to ErnestHemingway*. Ed. Linda Wagner-Martin. Oxford: Oxford U . pp.53-92.

Benson, Jackson J. (1988) *Looking for Steinbeck's Ghost*. Norman: U of Oklahoma P.

Hays, Peter L. (1984) "Exchange between Rivals: Faulkner's Influence on *The Old Man and the Sea*." in *Ernest Hemingway: The Writer in Context*. Ed. by James Nagel. Wisconsin: U of

Wisconsin P. pp. 147-164.

Hediger, Ryan. (2008) "Hunting, Fishing, and the Cramp of Ethics in Ernest Hemingway's *The Old Man and the Sea*, *Green Hills of Africa*, and *Under Kilimanjaro*. *The Hemingway Review*. Vol.27, No.2 (Spring 2008) pp.35-59.

Hemingway, Ernest. (1952) *The Old Man and the Sea*. London: Arrow Books, 2004.

Hemingway, Ernest. (2005) *Under Kilimanjaro*. Eds by Robert W. Lewis and Robert E. Fleming. Kent, Ohio: The Kent State UP.

Hemingway, Ernest. (1935) *Green Hills of Africa*. New York: Scribner's.

Hemingway, Ernest. (1936) "On the Blue Water: A Gulf Stream Letter" *Esquire* 5:4 (April 1936): 21, pp.184-85.

Love, Glen A. (2003) *Practical Ecocriticism: Literature, Biology, and the Environment*. Charlottesville: U of Virginia P.

Meyers, Jeffrey. (1990) "Hemingway's Primitivism and 'Indian Camp'" in *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Ed by Jackson J. Benson. Durham: Duke UP. pp.300-08.

Sylverster, Bickford. (1996) "The Cuban Context of *The Old Man and the Sea*" in *The Cambridge Companion to Hemingway*. Ed. by Scott Donaldson. pp.243-68.

Timms, David. (1989) "Contrasts in Form: Hemingway's *The Old Man and the Sea* and Faulkner's *The Bear*" in *The Modern American Novella*. Ed. by A. Robert Lee: Vision Press Ltd., pp.97-112.

Valenti, Patricia Dunlavy. (2002) *Understanding The Old Man and the Sea*. Westport, Connecticut: Greenwood Press.

Williams, Terry Tempest. (1999) "Hemingway and the Natural World" (Keynote Address, Seventh International Hemingway Conference.) in *Hemingway and the Natural World*. Ed by Robert F. Fleming. Moscow, Idaho: U of Idaho P, pp.7-17.

Yamashiro, Shin. (2006) "Are Catastrophic Storms Integrative or Disinteractive?: Seascape as a Critical Framework in American Sea Literature" *Tamkang Review* 37.1 pp.99-120.

Yamashiro, Shin (2000). "The Gaze upon the Sea: The Oscillation between Physicality and Meditation in *Moby-Dick* (1851) and *Two Years before the Mast* (1849)" *Southern Review*. No.15. pp.79-85.

Yamashiro, Shin. (2008) "When Villains Become Victims: Sharks, Aquatic Animals, and Sea Ethic in American Literature." 山城新『19 世紀アメリカ海洋文学の基礎研究―ジオセントリズムのかたち』（科学研究費補助金若手研究（B）研究報告書 課題番号 17720051）pp.117-124.

比嘉美代子 (2008)「『キリマンジャロの麓で（*Under Kilimanjaro*）を読む―作家の苦悩と変身／再生のテーマ、作家再生の実験地アフリカ―」『ヘミングウェイ研究』No.9（August 2008）pp. 39-49.

伊藤詔子 (2006)「ソロー、ヘミングウェイ、T.T. ウィリアムス　ネイチャーライティングから反自然誌へ」『アーネスト・ヘミングウェイの文学』今村楯夫 編著 ミネルヴァ書房, pp. 143-161.

照山雄彦 (1999)『ヘミングウェイ―「愛」・「生」・「死」そこに求めた至上の精神』近代文芸社.

山里勝己 (2006)『場所を生きる：ゲーリー・スナイダーの世界』 山と渓谷社.
山里勝己 (1996)「ネイチャーライティング」『ユリイカ：特集＝ネイチャーライティング』青土社, pp.226－27.
山里勝己 (1996)「センス・オブ・プレイス」『ユリイカ：特集＝ネイチャーライティング』青土社, pp.230－31.

Environmental Philosophy in Hemingway's *The Old Man and the Sea*

Yukinori TOKUYAMA

Abstract

This paper explores an environmental dimension of Hemingway's novella, *The Old Man and the Sea* (1952). Despite his reputation as a hunter/fisherman, there is no doubt that Hemingway was environmentally conscious as a nature writer as several of his works clearly suggest. *The Old Man and the Sea* is the best example among his nature-conscious texts. In perusing aspects of the marine environment and Santiago's personal philosophy of fishing for sustenance in the novella, I argue that the novel belongs to environmental literature in the American literary tradition, especially that of the American eco poet, Gary Snyder.

Keywords: Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea*, environmental literature, marine environment,